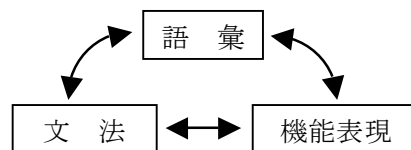


Interactive Online Dictionary の開発

水野 邦太郎 (慶応大学 SFC 研究所 訪問研究員)

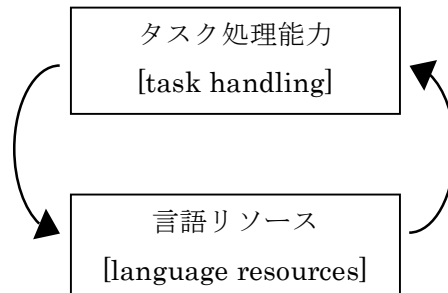
要 旨

われわれは「小中高の英語教育をデザインする」うえで必要な言語リソースの構成要素として、表現の駒にあたる「語彙」「機能表現」とそれを並べる規則にあたる「文法」の3部門を設けた「言語リソース・データベース」の開発を進めている。本発表では、わたしたちが語彙力・文法力・機能表現力をどのように規定し、それぞれの関係についてどのように捉えているかを説明する。



そして、この枠組みに依拠し具体化を進めている“Interactive Online Dictionary (IOD)”を紹介する。

英語教育の目標は「英語コミュニケーション能力(以降, “communicative competence” と呼ぶ)」の養成にある。われわれは communicative competence という概念を以下のように特徴づけることを提案している。



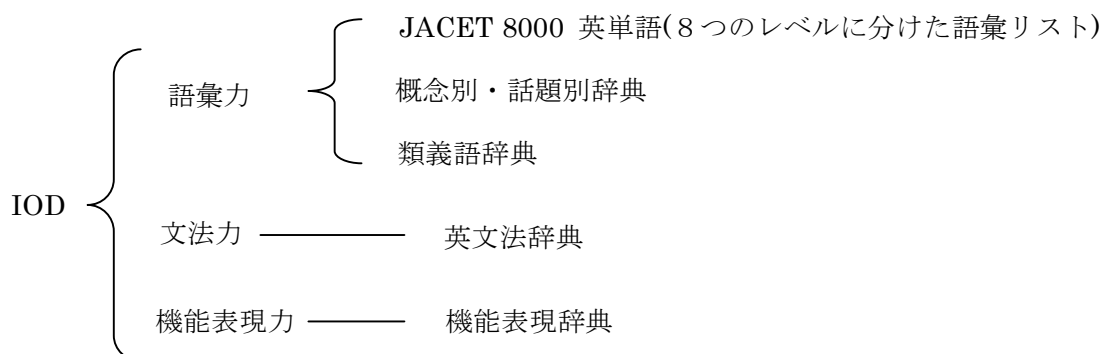
すなわち、ここでは「行為」としての「タスク処理能力(task handling)」と「知識」としての「言語リソース(language resources)」の相互運動として communicative competence を捉えている。

この communicative competence の定義を英語教育のあり方の展望(grand design)に適用させると、英語コミュニケーション能力を養成するには「task handling を行う場」と「言語リソースを学ぶ場」を作り出し、両者をうまく有機的に関連づけていくことが必要となる。task handling を行う英語使用の実践的な場として水野は、インターネット上に電子掲示板を活かした文化的実践共同体(IRC: Interactive Reading Community, IWC:

Interactive Writing Community)を創出し、学生たちの reading task と writing task を伴う英語コミュニケーション活動を促進してきた。学生たちは IRC や IWC への参加を通じて、「英語を使うことを通して英語を学ぶ」という“learning by doing”を実践しながら英語コミュニケーション能力を高めている (<http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/index.html>)。

しかし、英語教育のすべての局面が“learning by doing”で対応できるわけではない。英語は日本人にとって「外国語」であり体系的な理解を伴う「学習」が強調され、consciousness-raising あるいは awareness-raising が指導原理になる局面が必要となるからである。そこで、学ぶ対象となる「英語というもの(言語リソース)」について教える側が「見取り図」を描いておく必要がある。そうした「教育の目的のために編纂される英語(Core English)」の拡充と洗練化を図るために、われわれは“Interactive Online Dictionary (IOD)”という言語リソース・データベースを開発している。

IOD には「英辞郎」編者の協力を得て 135 万のパラレルコーパスから「小中高大の英語教育をデザインする」うえで必要な「チャンク(慣用表現)」が入力されており、以下の5つの辞典から構成されている。



IOD の特徴は紙媒体では実現できないハイパーリンク構造を持っており、ひとつのチャンクが5つの辞典の該当するすべての項目にリンクされている。それによりひとつのチャンクを「語彙・文法・機能」の3つの側面から理解し、それらの相互関連性を有機的に理解することが可能になっている。また、辞典の項目ひとつひとつに対して認知的スタンスから説明をつけ、言語知識が統合され体系的な理解が伴うようにチャンク間・辞典項目間の相互関連のネットワークをハイパーリンクで示している。さらに、IOD を媒介にして全国の小中高大の生徒たちがお気に入りのチャンクをなぞりながら「英借文」をつくって投稿しそれが添削され、生徒たちの「作品」が時空を超えて分かち持たれる「みんなで作る英和辞典プロジェクト」を構想している。また「チャンクの暗記」を遊び感覚で競い合う「ボキャブラリー・マラソン」といった教育的工夫(pedagogical device)も実装されている。本発表では、上記のような特徴を兼ね備えた IOD を紹介する。